

学校を単位とした授業研究プロジェクト

一 西都市立茶臼原小学校 2020 年度プロジェクト 一

竹内元ⁱ⁾・大泉佳広ⁱⁱ⁾・大野匠ⁱⁱ⁾・樺島優子ⁱⁱ⁾

実践報告要旨

本実践報告は、西都市立茶臼原小学校で行った学校を単位とした授業研究プロジェクトのうち、芸術家派遣事業として実施している芸術領域の授業研究に焦点化して報告したものである。芸術を通した学びは、何か目的があって作業することではなく、何かつくれるかを試行錯誤する活動をしながらか、当たり前や前例に縛られているものの見方・考え方を意味づけ直したり、価値を変えたりしていくものである。

1. 概要

本プロジェクトは、西都市立茶臼原小学校が西都市教育委員会を通して宮崎大学教育学部附属教育協働開発センターに依頼してきたものであり、学校の小規模化による宮崎県の公立学校が抱える課題に対して、教職大学院の知見と組織を活用し、地域の現職教員の研修機能を強化する取り組みである。

西都市立茶臼原小学校の前身は、私立の茶臼原小学校である。孤児救済にあたっていた石井十次によって明治 39 年に農業小学校が設立され、のちに大正 2 年に私立茶臼原尋常小学校として認可されている。大正末期に諸処の事情で孤児院と学校が閉じられた後、昭和 22 年 1 月に開設に至った創立 75 年目の学校である。令和 2 年度の児童生徒数は、45 名である。

西都市立茶臼原小学校は、学習集団づくりの実践と芸術家派遣事業の 2 つのプロジェクトから成り立っている。学習集団づくりの実践は、本年度は、2020 年 6 月 17 日、9 月 9 日、10 月 28 日に行われたが授業参観と事後検討会に竹内が参画している。芸術家派遣事業は、2021 年 1 月 27 日と 1 月 28 日に行われ、大泉・大野が企画・実施している。本稿では、芸術家派遣事業に焦点化して報告する。

2. 実施日と内容

芸術領域の授業研究は、もともと学校への芸術家派遣事業としてスタートしたものである。「芸術を通した学び」を構成する活動は、本学教員でもあり、絵画、彫塑、デザインのアーティストによるものである。2013 年度に実施した延岡市立浦城小学校を始めに、日向市立日知屋小学校を経て、西都市立茶臼原小学校(2014 年度)から継続して実施している。西都市立茶臼原小学校では、「竜宮城に行ってみよう」(2015 年度)、「不思議なたね」(2016 年度)、「地上絵」(2017 年度)、「ビニールで遊ぼう」(2018 年度)、「木の声を聞く」(2019 年度)と毎年行っており、2020 年度は、以下のように実施した。

i) 宮崎大学大学院教育学研究科

ii) 宮崎大学教育学部

期間：2021年1月27日(水)・1月28日(木)/2020年10月28日(水)に打ち合わせ

参加児童：小学校5・6年生18名

素材：ビニール素材

場所：体育館、校庭

芸術領域の授業研究は、「教えない図工」をテーマとして、子どもたちとの造形活動とアーティストだけの造形活動を組み合わせ、造形を通した子どもたちとアーティストの対話の試みである。「こういうものをつくればよい」といった答えを示すものでもなく、アーティストと何かすごいものをつくったという体験をさせるのでもない。アーティストは、図画工作を担当する教師として子どもたちの創作活動を手伝うのでもなく、子どもたちにとっての意味を考えながら生きた教材として子どもと教師に接する存在である。なお、アーティストは、平面と立体、抽象と具象などの違いが互いにつきつけられ、個々の価値観や関係性が揺れる経験も積み重ねてきている。そうしたなかで、3名のアーティストがフラットな関係でなく、主たるリーダーを決めて、誰の思想を具現化していくかを検討し、実践してきた。また、当初は、子どもたちがつくり出す動機づけが活動に埋め込まれていた。たとえば、1日目は鬼のかつらづくりからはじまり、子どもたちが空想の島を落書きすると、次の日にアーティストによって島が少しだけつくられており、2日目は、子どもたちと島の街づくりをする。3日目には、2日目につくった街が少しあらされ、なぞのピーチ国が攻めてくるという“果たし状”が発見される。子どもたちは街を守るため、防具や武器をつくり始める。こうしたストーリーの展開が用意されていたのだが、年々、つくりだす動機づけの側面はなくなり、素材の魅力が子どもたちを動かす展開になってきている。そうした実践で重視する視点が推移してきた背景には、3人のアーティストが学部・附属共同研究に参画し、附属学校園と協働して教員研修を開講している点がある。「素材なのか、材料なのか」といった図画工作や美術の教育研究テーマがアーティストの視野に入り、アルミホイルやビニールで何ができるか、どのような素材と対話できるのかという図画工作の授業実践のもう一つの発展性を追究するようになったのである。

ところで、多くの子どもたちも学生も、たとえば、傘袋は傘を入れる袋だけにしか見えていない。おはしはおはしにしか見えておらず、木とおはしはつながっていない。木彫室でお弁当を食べようとして弁当におはしがついていなかったことに気づいたとき、学生は木彫室にいるのに木彫室に転がっている廃材を削っておはしにしようとはせず、弁当屋に再びおはしを取りに行くのである。ここで言う素材との対話とは、木で木琴をつくるといったように、何か目的があって作業することではない。設計図に基づいて物をつくるのではなく、その場で手に入れるものを寄せ集め、何がつくれるか試行錯誤しながら最終的に新しいものをつくるブリコラージュである。

3. 実践の成果

ジャングルジムなどの遊具をすずらんテープで覆いつくそうとしたとき、子どもたちは鉄棒を巻き始めたので、アーティストはビニールのクッションやかべをつくって遊び始めた。すると、子どもたちはベッドをつくり始めた。子どもたちは素材を扱う際に、当たり前や前例にしばられる。こんなものもあるよとイメージにしばられて、目的に対する手段としての活動になってしまったとき、アーティストは適度な裏切りを示すのであり、子どもたちが想定する範囲にあることを示さない点にアーティストの注意は向けられる。そうしたなかで、子どもたちはすずらんテープでジャングルジムの意味を変えていくのである。また、傘袋に空気を入れて造形をしていたとき、子どもたちは人形やぬいぐるみをつくり、ポスカで描いたりしていたが、そのうち、つくったもので飛ばし合いが始まり、投げ合いになり、“ポンポン”というゲームが生まれた。ルールに従って活動を構成するのではなく、活動が変化するなかで、ルールが決

まり、遊びが発展していくのである。そうしたなかで、傘袋の意味が子どもたちのなかでも変化していくのである。

2020 年度の実践は、造形的な見方・考え方はものの意味や価値を変えていくという観点から傘袋・ゴミ袋・すずらんテープといったビニール素材から子どもたちにとって何が変わるのかを探究したものとなったのである。